

臍帯血移植後の CD4-DLI

東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科・発生発達病態学分野
同・医学部附属病院・細胞治療センター

森尾友宏

臍帯血移植においては、その他の造血細胞移植と同様に、原疾患の再発、難治性感染症に苦労することがあると共に、移植片拒絶や生着遅延・混合キメラなどが問題となる。様々な利点のある臍帯血移植であるが、生着不全や移植後二次性免疫不全などに起因する病態に対して、ドナーリンパ球輸注(DLI)を行うことができないことは、不利な点の1つである。

私たちは DLI に代わる治療法として、生着細胞から、あるいはバッグに残った臍帯血から CD4T 細胞を活性化増殖して用いる CD4-DLI 療法についての基礎的研究、探索的臨床研究を進めてきた(厚生労働科学研究ヒトゲノム・再生医療等研究事業「骨髄、末梢血等を利用した効率的な造血幹細胞移植の運用・登録と臨床試験体制の確立並びにドナー及びレシピエントの安全確保と QOL 向上に関する研究」班 - 研究代表者: 小寺良尚、政策創薬総合研究事業 KHC2032 「臍帯血 DLI の実用化と細胞治療製剤の医薬品化へ向けてのトランスレーションナルリサーチ」- 研究代表者: 藤原成悦)。

基礎的検討からは、東京臍帯血バンクから研究用として提供された保存臍帯血を用いて培養を行い、約 2-3 週間に CD4 陽性細胞は T 細胞レパートアを保ったまま 300 倍程度増殖させることができることが明らかになった。調製した細胞のプロファイリングについても上記研究事業にて研究が進み、産生する生物活性物質や、特徴的な細胞亜群についての情報集積しつつある。

移植・輸注後にバッグに残った細胞を洗浄して回収する形での培養においても、同様に良好な細胞増殖を得た。しかし、増殖培養に関しては施設間差(調製作業者間差)があり、同ロットの培地・フラスコで解決はされず、より詳細な SOP の統一が必要である可能性が示唆されている。調製できた細胞ではウイルスの検出はほとんどなく(20 例中 1 例にて EBV が陽性: 健常ドナーからでは 44 例中 5 例で EBV が陽性 - 定量感度以下 - 4 例で HHV7 が陽性-1 例は定量感度以下)、その点でも有利であると考えられる。

一方、CD4-DLI を必要とする患者に生着したリンパ球からの細胞培養は困難である場合が多く、HIV 感染患者からでは培養可能な CD4 陽性細胞: 10 個/ μL レベルでの培養は困難を極めると共に、培養後のウイルス検出も問題になる。さらには原疾患によっては白血病細胞の混在などへの最大限の留意が必要になる。

今までの探索的臨床研究からは、臍帯血移植後のガンシクロビル抵抗性 CMV 感染症、重症コクサッキーウィルス感染症などに、臍帯血より増幅した CD4T 細胞の輸注が有効であることが示されている。

臍帯血から調製した CD4T 細胞の CD4-DLI では、臍帯血リンパ球が抗原にさらされていない naïve 細胞であるため、輸注した増殖 CD4T 細胞は、レシピエントに生着した免疫担当細胞の機能を、サイトカインあるいは細胞間相互作用によって増強しているものと推察される。抗原特異的 CD4T 細胞輸注は抗原特異的 CD8T 細胞輸注より少ない量で効果が高いとされているが、この細胞群を直接入れていないにも関わらず、効果を認める症例があることは注目に値する。

ハイリスク移植時の生着不全、移植後再発、移植後感染症を懸念しての(予め)調製依頼などの要望が多い中、本研究の中で対象とすべき疾患群の選定が重要である。調製した細胞の品質管理に関しては、品質管理・安全保証・製品規格化に関する厚生労働省班研究で検証しつつ、本研究班の中で臨床試験を進めたいと考えている。

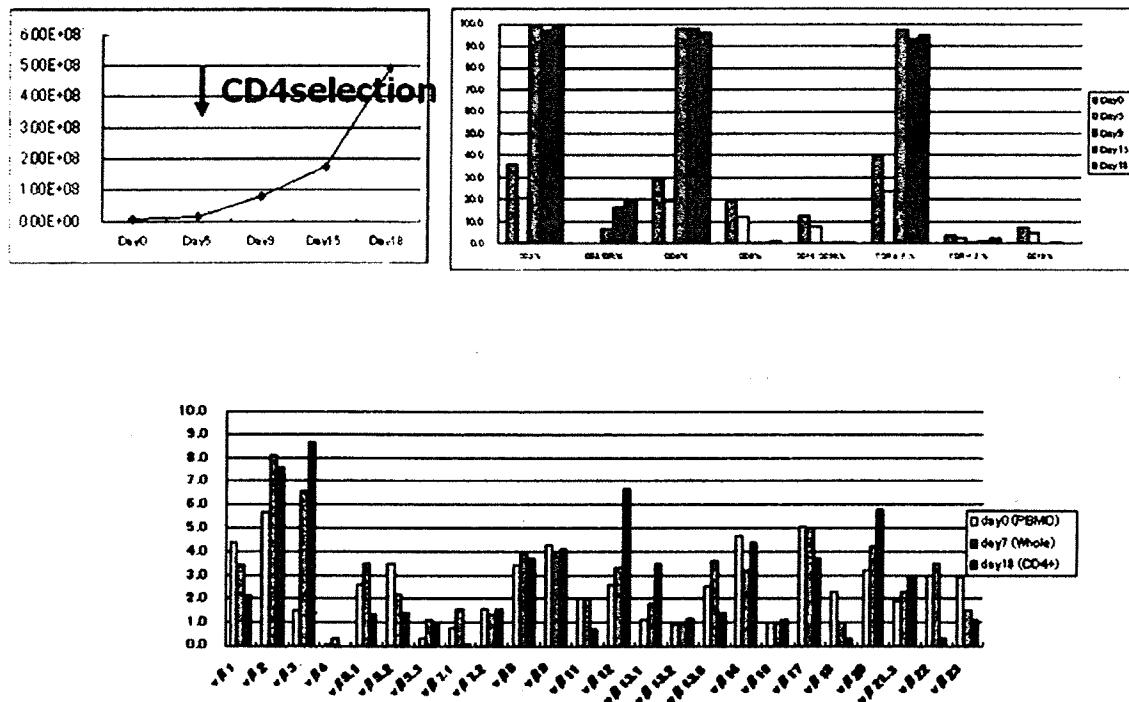


図1 脘帯血からのCD4T細胞培養

臍帯血を用いる造血幹細胞移植技術の高度化と
安全性確保に関する研究」班会議資料

小児臍帯血移植に関する研究

平成20年6月6日

磯山憲一
昭和大学藤が丘病院小児科

検討課題

- 1 小児さい帯血移植に対するリン酸フルダラビンを用いた前処置法の確立
- 2 リン酸リソフルダラビンの移植前処置薬としての適応拡大申請について
- 3 小児急性骨髓性白血病に対する臍帯血移植成績
初回移植としての臍帯血移植成績
再移植として臍帯血移植を使用した場合の成績

検討課題

- 1 小児さい帯血移植に対するリン酸フルダラビンを用いた前処置法の確立
- 2 リン酸リソフルダラビンの移植前処置薬としての適応拡大申請について
- 3 小児急性骨髓性白血病に対する臍帯血移植成績
初回移植としての臍帯血移植成績
再移植として臍帯血移植を使用した場合の成績

2 リン酸フルダラビンの移植前処置薬としての適応拡大の承認について

- ・成人領域と同時に小児領域の移植前処置としての適応拡大申請への協力を行なった。
- ・日本小児血液学会のデータベースから、リン酸フルダラビンを使用した造血幹細胞移植の実態調査を行ない資料として提出
- ・日本シェーリング社が医薬品総合機構へ申請
結果
適応疾患: AML、MDS、CML、CLL、ML、MM
小児への使用制限はない
ALL、SAA、先天性免疫不全症、先天性代謝異常疾患などに
対する移植前処置薬としては未承認

3 小児急性骨髓性白血病に対する臍帯血移植成績

初回移植としての臍帯血移植について: BJHへ投稿中
Title : Long-term Outcome of Cord Blood Transplantation From Unrelated Donors as an Initial Transplantation Procedure for Children with Acute Myeloid Leukemia in Japan

小児急性骨髓性白血病140例の臍帯血移植後6年の成績
初回覚解期ではDFS 67.7%、OS 70.4%であった。
移植CD34陽性細胞数 1.35×10^5 以上では生着率が高い。
GVHD予防としてMTXの未使用は成績を低下させる。

3 小児急性骨髓性白血病に対する臍帯血移植成績

再移植として臍帯血移植を使用した成績
: Bone Marrow Transplantationへ投稿中
Title : Survival after Cord Blood Transplantation from Unrelated Donor as a Second Hematopoietic Stem Cell Transplantation for Recurrent Pediatric Acute Myeloid Leukemia

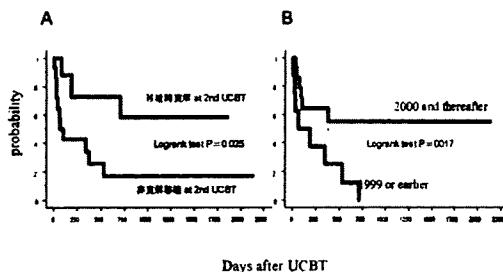
小児AML:再移植としての臍帯血移植成績

- 期間: 1997-2006年
- 症例数: 22例
- 年齢: 2-14歳
- 性別: 女児12例、男児10例
- 初回移植の種類
 - 自家移植 8例
 - 非血縁臍帯血移植 7例
 - 非血縁骨髄移植 7例
- 移植時の状態
 - 移植時状態 CR/NCR=8/14(例)
- 再移植時の前処置
 - RIC(reduced intensity conditioning) 12例
 - MAC(myeloablative conditioning) 10例

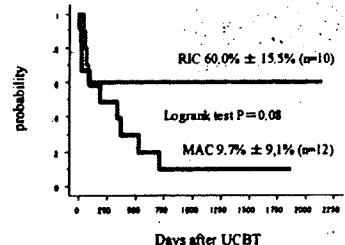
小児AML:再移植としての臍帯血移植成績

Case No.	Age at first UCBT	Sex	First UCBT	First UCBT CR/NCR	First UCBT Conditioning	Second UCBT	Second UCBT CR/NCR	Second UCBT Conditioning	Second UCBT	
									First UCBT	Second UCBT
1	10	F	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
2	10	M	1st UCBT	NCR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
3	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
4	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
5	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
6	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
7	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
8	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
9	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
10	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
11	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
12	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
13	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
14	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
15	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
16	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
17	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
18	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
19	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
20	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
21	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%
22	10	M	1st UCBT	CR	MAC	2nd UCBT	CR	RIC	100%	100%

小児AML:再移植としての臍帯血移植成績



小児AML:再移植としの臍帯血移植成績



厚生労働科学研究費 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業
「臍帯血を用いる造血幹細胞移植技術の高度化と安全性確保に関する研究」班
平成20年度第1回研究班会議 班会議資料

小児臍帯血移植におけるシクロスボリン至適使用法の検討 (2時間点滴のTDM)

京都大学大学院医学研究科 発達小児科学
足立壯一, 松原 央, 中畠龍俊

【背景】

日本造血幹細胞移植学会の「造血幹移植ガイドライン GVHDの診断と治療に関するガイドライン」では、各施設に一任されており、シクロスボリンの目標血中濃度、至適使用量および点滴静注時間等の方法は、各施設の経験に基づき行なわれている。我が国では、24時間持続点滴、1日2回点滴（2または3時間）、1日1回点滴（4時間または10時間）などがおこなわれているが、薬物体内動態について検討されているのは1日2回3時間点滴法だけである。また、海外からの報告は1日2回2時間点滴法で、その有効性やC₂値について検討したものである。

【目的】

小児臍帯血移植において、シクロスボリン注射液を1.5mg/kgの2時間点滴を1日2回行ない、投与前値（トラフ値：C₀）を目標値としてCyA使用量を調節して、急性GVHDの抑制効果を検討し、CyAの標準的な使い方を確立する。また、CyAの血中濃度の定期的な6ポイントモニタリングを実施し、急性GVHDの抑制効果に適切な血中濃度を検討する。

【方法】

- 1) 前処置法は、各施設に一任する。
- 2) GVHD予防のためにシクロスボリンをDay1より1.5mg/kgの2時間点滴を1日2回行う。MTXは、原則として、10mg/m²をDay1に7mg/m²をDay3、6に併用する。
- 3) 点滴静注は、原則移植後4週までとし、5週目以降は経口摂取が可能となった場合、すみやかにCyA-MEPCによる経口摂取に切り替え治療を行う。切り替えの目安は、点滴静注時の2倍量とする。
- 4) 用量調節について CyA-IV、あるいは、CyA-MEPC投与開始後、約3日後に、血中濃度を測定し、C₀値（トラフ値）が150～250ng/mLを目安に維持する。
- 5) 減量・中止について 移植後50日までは目標血中濃度を維持する。移植後50日からは各施設のregimenに従って減量を開始する。また、GVHDがなければ、6ヶ月を目安に減量・中止する。
- 6) シクロスボリン血中濃度値の測定について 移植後約3日後にC₀値を測定する。また、CyA開始後から移植後42日まで1週間に2回、C₀値を測定する。それ以後についても、可能な限り1週間に1回C₀値を測定する。また、移植後、7日目、14日目、21日目、28日目、内服に切り替え後1週目に、C₀値、C₁値、C₂値、C₄値、C₆値、C₁₂値の6ポイントを測定する。

厚生労働科学研究費 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業
「臍帯血を用いる造血幹細胞移植技術の高度化と安全性確保に関する研究」班
平成 20 年度第 1 回班会議 於愛知県がんセンター国際医学交流センター

成人における骨髓破壊的前処置による非血縁者間臍帯血移植の移植方法に関する研究（東京大学医科学研究所附属病院の移植法を用いた多施設第Ⅱ相臨床試験）の進捗状況

研究分担者 国立がんセンター中央病院 田野崎隆二

プロトコール概要

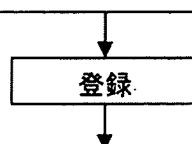
【目的】

東京大学医科学研究所附属病院の方法を用いて、同種造血幹細胞移植の適応となる成人造血器悪性腫瘍患者に対する骨髓破壊的非血縁者間同種臍帯血移植の有効性と安全性を評価する。

【対 象】

同種造血幹細胞移植の適応があり、HLA 適合または 1 抗原不適合の血縁者ドナーが存在せず、本研究の適応基準を満たす以下の 20~54 歳の造血器悪性腫瘍患者

- 1) 初回完解期でない de novo 急性骨髓性白血病
- 2) 急性リンパ性白血病；第 2 回目以降の完解期
- 3) 予後不良な初回完解期の急性白血病
- 4) 慢性骨髓性白血病；第 2 回目以降の慢性期、および移行期
- 5) 骨髓異形成症候群(RAEB-1、RAEB-2 および輸血依存性が高いあるいは高リスク染色体異常を有する RA) および骨髓異形成症候群から移行した急性骨髓性白血病



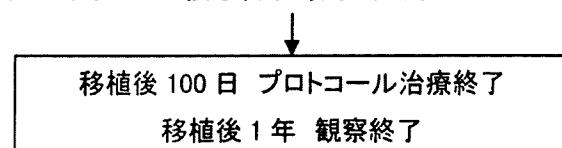
☆登録後は研究調整医師と連絡を取り、原則として医科研の方法を再現するように努めて移植を施行する。

【臍帯血移植】 移植至適時期に遅滞なく移植

day	-8	-7	-6	-5	-4	-3	-2	-1	0
TBI	12 Gy	↓	↓	↓					
G-CSF*	5 μg/kg				↔				
Ara-C	3 g/m²				↓	↓	↓		
CPA	60 mg/kg						↓	↓	
臍帯血移植									×
シクロスボリン	3 mg/kg 10 時間点滴								
MTX**									

*骨髓系造血器腫瘍に対しては、G-CSF 5 μg/kg/day をシタラビン開始 12 時間前より持続投与。

終了は 2 日目 2 回目のシタラビンの投与終了時刻とする。



予定被験者数および研究実施期間

計 28 例

登録期間は第 1 例目登録から 3 年間。追跡調査期間は最終登録例の移植後 1 年まで。

進捗状況(平成 20 年 5 月 30 日現在)

No	参加施設名	IRB 承認日*	患者登録数
1	札幌北楡病院	2007/10/29	0
2	北海道大学	2008/2/8	0
3	岩手医科大学附属病院	承認済	0
4	秋田大学医学部	未	0
5	新潟大学医学部	2008/4/23	0
6	金沢大学医学部附属病院	未	0
7	東京都立府中病院	未	0
8	帝京大学医学部	承認済	0
9	日本医科大学附属病院	2008/1/23	0
10	東京慈恵会医科大学附属柏病院	未	0
11	虎の門病院	未	0
12	国立がんセンター中央病院	2007/12/19	0
13	名古屋市立大学病院	2008/1/9	0
14	京都大学医学部	未	0
15	神戸市立医療センター中央市民病院	未	0
16	大阪大学医学部附属病院	未	0
17	大阪府立成人病センター	未	0
18	大阪市立大学医学部附属病院	2007/10/25	0
19	岡山大学病院	2008/5/8	0
20	愛媛大学医学部附属病院	未	0
21	九州大学医学部	2008/1/7	0
22	久留米大学医学部	2007/11/5	0

*書類送付がされていない場合は日付を記載していない。

参加施設数*	22
IRB 承認施設数	12
登録患者数	0

*参加辞退 1 施設

高齢造血器疾患患者の背景

- 進行期や化学療法不応例が多い
化学療法だけでは治癒が困難
- 併存疾患有する
大量化学療法が困難、移植関連合併症の増加？
- 血縁ドナーが得にくい
比較的短期間に入手可能な移植細胞が必要



臍帯血ミニ移植は上記条件を満たす可能性がある。

患者背景

2002年7月から2005年10月までに虎の門病院で臍帯血ミニ移植を施行した55歳以上の造血器疾患患者

解析症例数 : 70

男	45 (64%)
女	25 (36%)

HCT-CI

0	24 (34%)
1	25 (36%)
2	11 (16%)
3≤	10 (14%)

年齢

中央値: 61 (55 - 79)

疾患リスク

標準*	15 (21%)
高**	55 (79%)

*標準リスク: CR1, CR2, untreated MDS, and SAA
**高リスク: 離標準リスク以外

診断名

AML/MDS	31 (44%)
ALL	11 (11%)
ML	8 (11%)
ATL	12 (17%)
CML	4 (6%)
Others	4 (6%)

2008.6.6

合併症会議

患者背景

移植前状態	No.	%
Flu / Mel / TBI	65	93
Flu / Bu / TBI	4	6
Others	1	1

GVHD予防	No.	%
Ciclosporin A	37	53
Tacrolimus	33	47

移植臍帯血とのHLA適合度	No.	%
5 / 6	9	13
4 / 6	61	87

移植臍帯血との性別一致度	No.	%
一致	19	27
不一致	51	73

2008.6.6

合併症会議

血球回復

累積好中球生着率: 92%

生着までの期間: 中央値 18日 (11-53日)

解析可能例: 60名

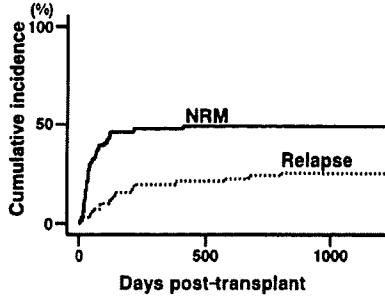
10名は、感染症(7)、CNS合併症(2)、原病悪化(1)による移植後28日以内の早期死亡の為、解析対象外となつた。

10名中移植後12、15、20日の時点でのキメリズム検査を実施し得た3名は全て>90%の完全ドナー型キメラを達成していた。

2008.6.6

合併症会議

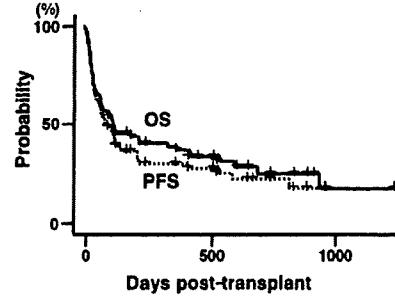
累積非再発死亡と累積再発



2008.6.6

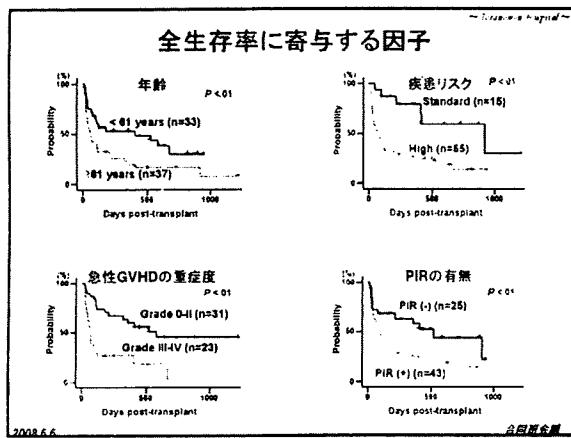
合併症会議

全生存率と無増悪生存率



2008.6.6

合併症会議



多変量解析結果

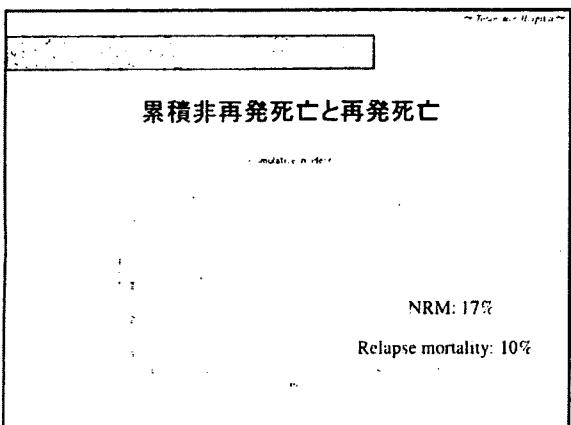
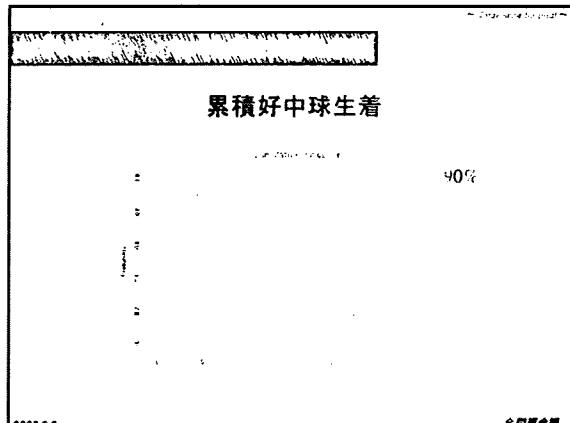
因子	HR	95%CI	P
OS			
年齢	<61	1.0	
	≥61	3.3	1.39-8.33 .006
疾患リスク	標準	1.0	
	高	3.3	1.01-8.33 .049
PIR	無	1.0	
	有	2.5	1.14-6.25 .023
急性GVHD	0-II度	1.0	
	III-V度	2.5	1.28-5.88 .0002
NRM			
GVHD予防	CsA	3.9	1.3-11.6 .01
	Tac	1.0	
急性GVHD	0-II度	1.0	
	III-V度	5.7	2.1-15.7 .001

2008.6.6 合同研究会議

死因

死因 (Total 50)	No.
非再発死亡	37 (53%)
感染症	19 (27%)
GVHD	9 (12%)
IP	4 (6%)
TMA	3 (4%)
その他	2 (3%)
再発死亡	13 (19%)

2008.6.6 合同研究会議



6月6日(金)

午後

ホール

造血細胞移植合同班会議 プログラム

平成 20 年 6 月 6 日 (金) 午後／ホールの部

◆ ご挨拶 13:00~13:10 「フルダラの適応拡大について」 高上 洋一／国立がんセンター中央病院

【第1部】 13:10~15:50 福田班 (厚生労働科学研究 がん臨床研究事業)

「治療関連合併症を減少させて同種造血幹細胞移植後の生存率の向上を目指す標準的治療法の開発研究」
(H19・がん臨床・一般・019)

1 班研究の方向性・高度医療評価制度について (p.1)

13:10~13:20 福田 隆浩／国立がんセンター中央病院

2 造血細胞移植における foscarnet 使用実態の全国調査 進捗状況～ (p.4)

13:20~13:30 池亀 和博、吉原 哲、朝倉 舞子、鈴木 律朗／兵庫医科大学、名古屋大学医学部

3 造血幹細胞移植後 GVHD 発症患者における VRCZ または ITCZ 投与時の深在性真菌症発症
予防効果（有効性と安全性）を検討する多施設共同無作為化非盲検臨床試験 (p.6)

13:30~13:50 神田 善伸／自治医科大学附属さいたま医療センター

4 移植片対宿主病 (GVHD) の新たな診断・治療基準に基づいた臨床試験の経験：慢性 GVHD に
対するリツキシマブ療法の安全性及び有効性の評価を目的とした臨床第Ⅱ相試験 (p.9)

13:50~14:10 豊嶋 崇徳／九州大学病院

5 非血縁者間同種骨髓移植におけるフルダラビン、静注ブスルファンおよび低用量 ATG による
骨髓非破壊的前処置の安全性・有効性を検討する多施設共同臨床試験 (p.12)

14:10~14:30 福田 隆浩／国立がんセンター中央病院

6 MMF の造血細胞移植領域での適応拡大のためには (p.16)

14:30~14:35 福田 隆浩／国立がんセンター中央病院

7 1) PK study に基づいた MMF 分 3 投与の必要性 (p.17)

2) 予防的治療を兼ねた day30 以降 MMF 減漸投与の有用 (p.20)

14:35~14:50 岡村 篤夫、松井 利充／神戸大学大学院

8 高齢者に対する Tacrolimus+MMF による GVHD 予防を用いた臍帯血ミニ移植 (p.22)

14:50~15:00 内田 直之、谷口 修一／虎の門病院

9 同種骨髓破壊的移植におけるミコフェノール酸モフェチル (MMF) または短期メソトレキセート (sMTX) 投与の急性移植片対宿主病 (aGVHD) 予防効果（有効性と安全性）に対する多施設共同無作為化非盲検臨床試験 (p.24)

15:00~15:20 中根 孝彦、日野 雅之／大阪市立大学大学院

10 ステロイド抵抗性移植片対宿主病(GVHD)に対するミコフェノール酸モフェチル(MMF)の有効性と安全性を検討する多施設共同非盲検第II相臨床試験 (p.26)

15:20~15:35 高見 昭良／金沢大学医学部附属病院

11 造血幹細胞移植患者の長期フォローに関する実態調査 (p.29)

15:35~15:40 萩原 將太郎／国立国際医療センター

12 造血幹細胞移植患者に対する栄養管理前向き臨床試験 (p.31)

15:40~15:50 藤 重夫、金 成元／国立がんセンター中央病院

<休憩時間： 15:50~16:00>

【第2部】 16:00~16:30 森班 (厚生労働科学研究 がん臨床研究事業)

「再発等の難治性造血器腫瘍に対する同種造血幹細胞移植を用いた効果的治療法確立に関する研究」
(H19・がん臨床・一般・026)

13 班研究の方向性と今後の研究課題について

16:00~16:30 森 慎一郎／国立がんセンター中央病院

【第3部】 16:30~16:40 大島班 (厚生労働科学研究 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)

「薬物治療モニタリングによる造血幹細胞移植成績の向上に関する研究」(H20・免疫・若手・029)

14 薬物治療モニタリングによる造血幹細胞移植成績の向上に関する研究 (p.33)

16:30~16:40 大島 久美／自治医科大学附属さいたま医療センター

【第4部】 16:40~17:20 神田班 (厚生労働科学研究 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)

16:40~17:20 谷口班 (厚生労働科学研究 医療技術実用化総合研究事業)

「アレムツズマブを用いた HLA 不一致同種造血幹細胞移植療法の医師主導治験および造血幹細胞移植領域における医師主導治験発展のための研究」(H19・免疫・一般・011)
「多施設共同医師主導治験による新規医薬品の効果に関する臨床的エビデンス創出と新移植技術の開発研究」(H20・臨床研究・一般・007)

15 アレムツズマブに関わる医師主導治験の背景、進捗状況 (p.36)

16:40~17:10 神田 善伸／自治医科大学附属さいたま医療センター

16 CMV ワクチンの現状 (p.44)

17:10~17:20 浜口 功／国立感染症研究所血液・安全性研究部

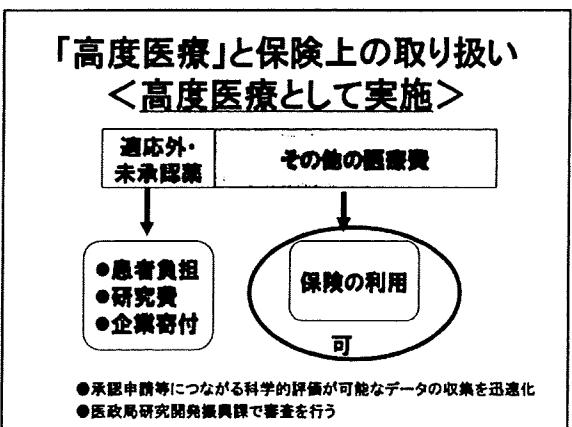
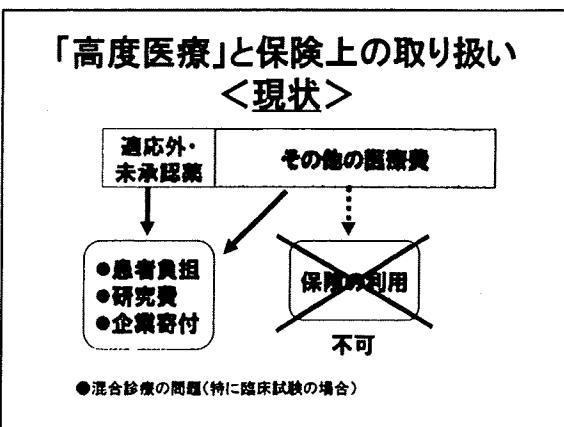
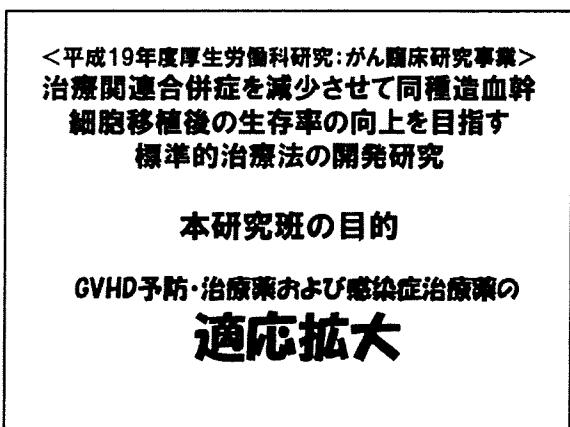
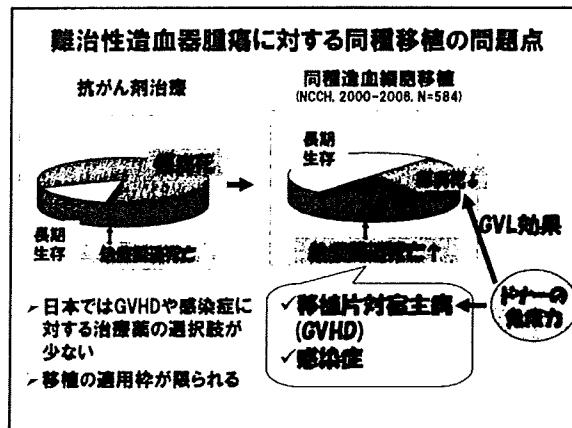
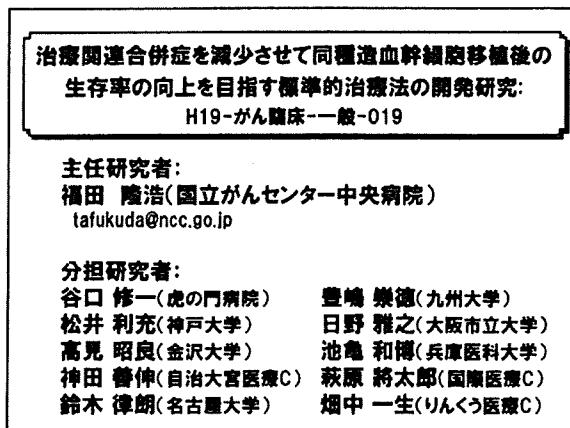
【第5部】 17:20~17:50 金班 (厚生労働科学研究 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業)

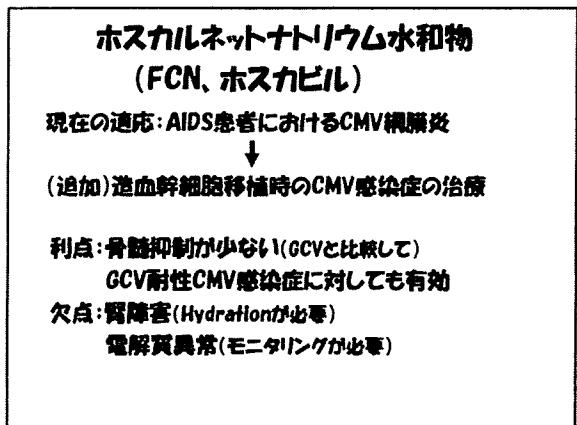
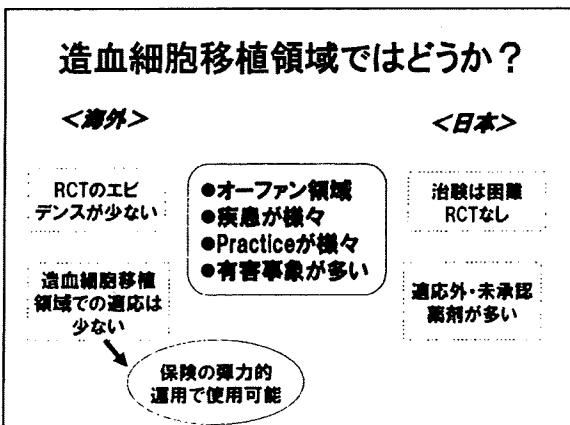
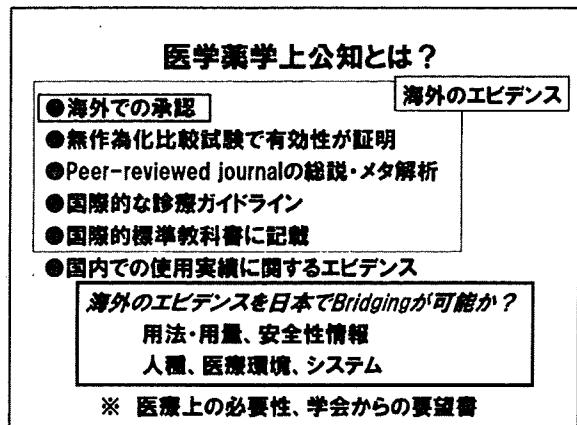
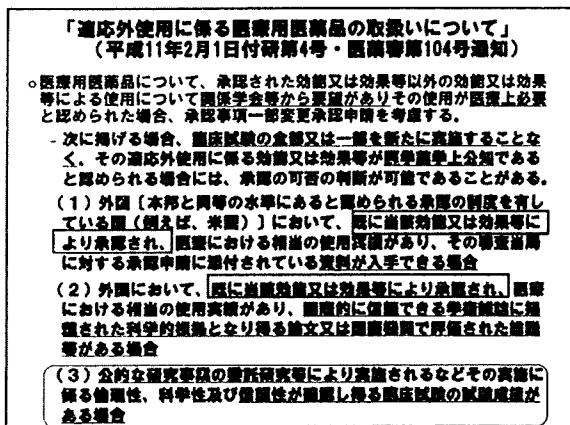
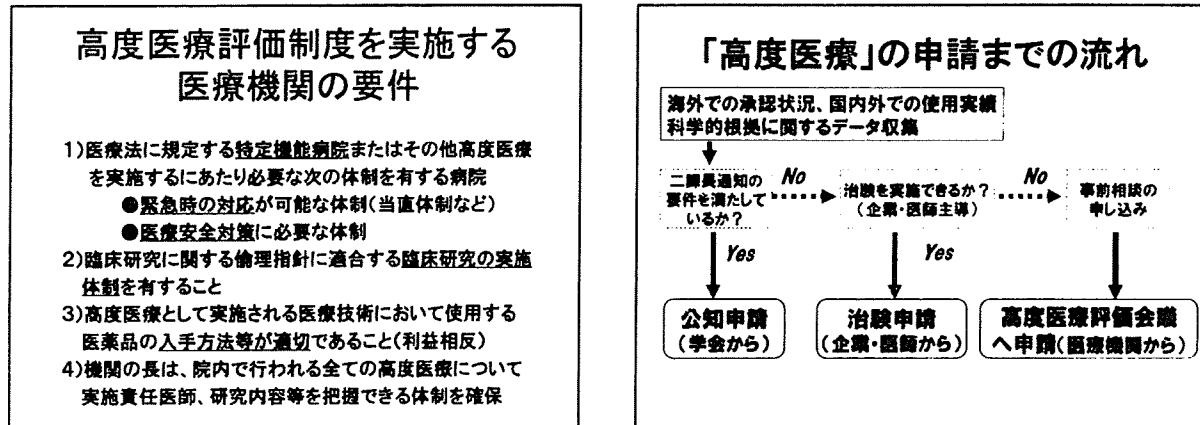
「造血幹細胞移植におけるドナーの安全性と倫理的保護を確保したコーディネートシステム構築に関する研究」(H19・免疫・若手・002)

17 血縁者間同種造血幹細胞移植におけるドナーコーディネートの多角的検証について (p.45)

17:20~17:50 金 成元／国立がんセンター中央病院

#1 福田班(福田イントロ)





#1 福田班(福田イントロ)

無作為化比較試験のエビデンス(FCN)
(Reusser, Blood 2002)

<EBMT study>

CMV antigenemia/PCR-based Preemptive therapy(計213例)	
●FCN 60 mg/kg q12h	●GCV 5 mg/kg q12h

FCN (n=110)	GCV (n=103)	P value
CMV disease 4.5%	4.9%	NS
ANC (<500) 4%	11%	0.04
腎障害 5%	2%	NS

FCN(ホスカビル):HCT後のCMV感染症

- 海外承認 → なし(予定なし)
- 無作為化比較試験で有効性が証明
 - 海外で213例の試験(Pivotal trial)
- Peer-reviewed journalの総説・メタ解析
 - 海外
- 国際的な診療ガイドライン → CDC、ドイツ、日本
- 国際的標準教科書に記載
 - オツクスホード、ハリソンほか多数
- 国内での使用実績に関するエビデンス
 - 使用状況の全国調査(池亀・鈴木)

ネオーラル:重症筋無力症

- 海外承認 → なし
- 無作為化比較試験で有効性が証明
 - 二重盲検プラセボ対照比較試験あり
- Peer-reviewed journalの総説・メタ解析
 - 海外6
- 国際的な診療ガイドライン → 海外1、日本1
- 国際的標準教科書に記載 → ハリソン他2
- 国内での使用実績に関するエビデンス
 - MR調査(27施設、46症例)
 - 班研究(後ろ向き詳細調査10例)
 - 国内から6報

造血細胞移植分野で適応がないGVHD・感染症治療薬

- ✓セルセプト(MMF):GVHD抑制
- ✓ゼットブリン(ATG):GVHD抑制
- ✓ホスカビル(FCN):CMV感染治療
- ✓ブイフェンド(VRCZ):真菌感染予防
- ✓イトリゾール(ITCZ):真菌感染予防

▶海外では標準治療
▶日本でも適応外使用が増加
▶移植はオーファン領域
(2005年初回移植:2340件)
↓
企業治療は困難

本研究班の目的

- ▶日本人における至適用法・用量
- ▶安全性・有効性のエビデンス
- ▶造血細胞移植分野での適応拡大

GVHD・感染症治療薬の適応拡大へ向けて

造血細胞移植学会
①全国調査 FCN, MMF, ATG
②臨床試験 ATG, MMF, VRCZ, ITCZ
③エビデンスレポート 適応拡大申請
福田班
臨床企業
厚生省 PMDA

**<平成19年度厚生労働科学研究:がん臨床研究事業>
治療関連合併症を減少させて同種造血幹細胞移植後の生存率の向上を目指す標準的治療法の開発研究**

本研究班の目的

適応拡大

ご協力よろしくお願いします

#2 福田班(池亀・吉原・朝倉・鈴木)

平成20年度厚生労働科学研究 福田班
「治療関連合併症を減少させて同種造血幹細胞移植後の生存率の向上を目指す標準的治療法の開発研究」

造血細胞移植におけるfoscarnet 使用実態の全国調査 ～進捗状況～

兵庫医科大学 血液内科 池亀和博、吉原哲
名古屋大学 造血細胞移植情報管理学 朝倉舞子、鈴木律朗

研究の目的

- 本邦における同種造血幹細胞移植後CMV感染症に対するfoscarnetの安全性・有効性を明らかにする
- 上記データをもとに、foscarnetの本邦での保険適応承認を目指す

「新薬の承認前の臨床研究として用いられた国内データを学会が掌握し、その安全性と有効性即ち有用性が“公知”であることを、学会が責任を持つて表明すること……」

「日本血癌研究会及び日本腫瘍治療学会より
新薬承認に向けたこの学会基準の検討について」
より抜粋

研究の方法

1次調査: foscarnet使用症例数
2008年8月
2次調査: foscarnet投与の理由(必要性)
foscarnet投与による有害事象(安全性)
foscarnet投与による治療効果(有効性)

上記をもとに、本邦での至適用法・容量について、標準的治療法作成のための検討を行う
同種造血幹細胞移植後のCMV感染症に対するfoscarnetの保険適応承認申請を行う

進捗状況(1次調査の結果)

1次調査表回収施設数	169施設／227施設
FCV使用「有」施設数	67施設
FCV使用症例数	369症例

TRUMP上でFCV使用歴「有」となっているにも関わらず、使用歴「無」と回答のあった施設7施設と、1次調査の回収ができていないが、TRUMP上でFCV使用歴「有」と把握できている施設7施設に2次調査を発送予定(25症例分)

2次調査の内容(ポイント)

投与の理由(必要性)を明らかにする
Ganciclovirで効果が不十分
Ganciclovirで有害事象
造血能が不十分
投与による有害事象(安全性)を検討する
電解質異常(低カルシウム血症、低マグネシウム血症)
腎機能障害
骨髄抑制(少ないはず)
治療効果(有効性)を検討する
症状
画像所見
抗原血症

Foscarnetの使用状況をお知らせください

- 投与理由をご記入ください。
- 投与開始時の末梢血データをご記入ください。
- 総投与期間をご記入ください。
- 投与量および投与期間をご記入ください。
- Foscarnet投与時の併用薬（免疫抑制薬、抗菌薬、抗真菌薬、抗ウイルス薬）
- 治療効果はどうでしたか？
- Foscarnetによる有害事象があればご記入ください。
- 腎機能検査の推移をご記入ください。
- Pharmacokineticsのデータがあればご記入もしくは添付してください。

#2 福田班(池亀・吉原・朝倉・鈴木)

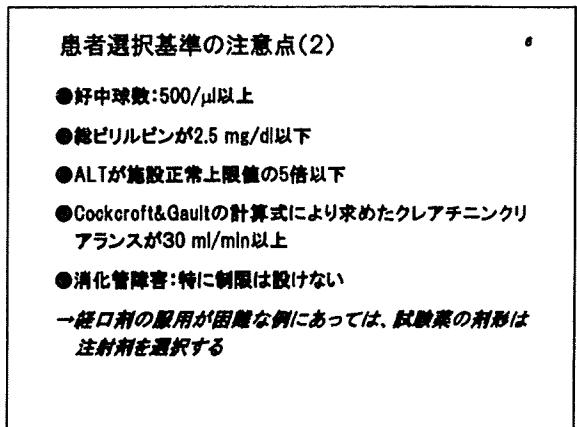
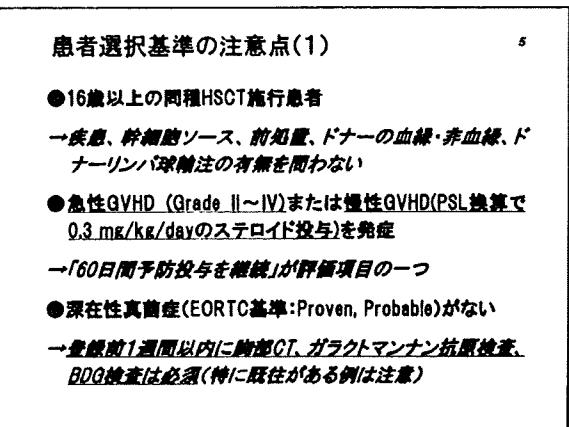
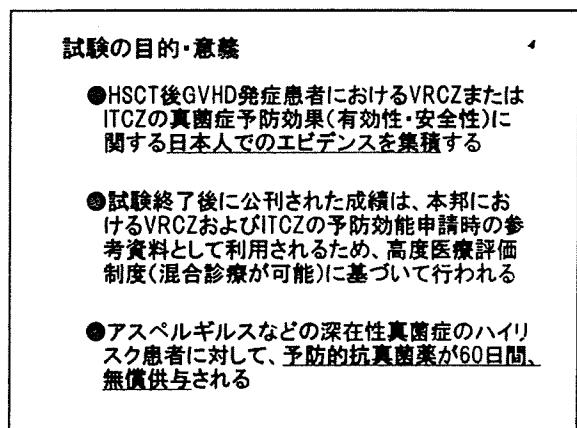
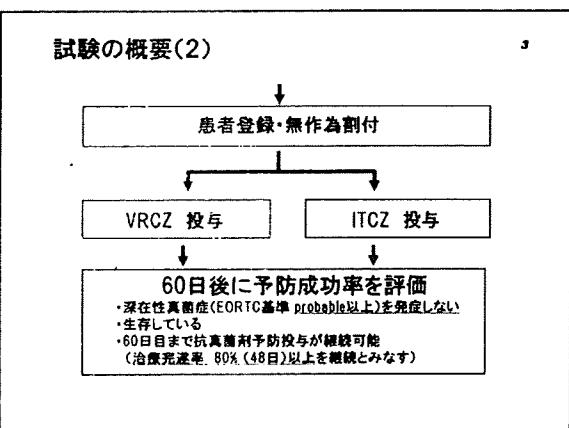
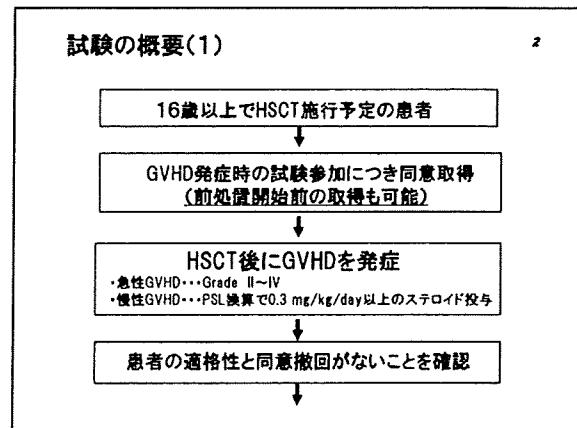
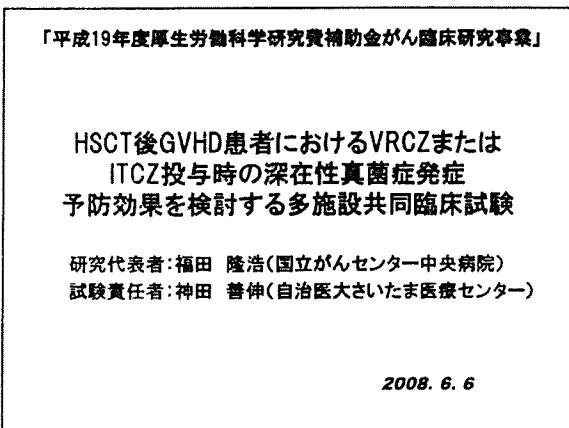
Foscarnet投与前のCMV治療についてお知らせください

- 問1. Foscarnet使用前にCMVに対する治療をされていましたか？
- 問2. (問1で“YES”と回答された方のみ) それはどのような治療ですか？
- 問3. 投与量および投与期間をご記入ください。
- 問4. その結果、どのような治療効果が得られましたか？
- 問5. 前治療薬の有害事象があればご記入ください。

アンケート、よろしくお願いします。

(MMF, ATGについても、何卒ご協力お願いいたします)





#3 福田班(神田)

患者除外基準の注意点

- 本登録前7日以内にVRCZまたはITCZを投与されている患者。但しフルコナゾール、ミカファンギンなどは、本登録日までに投与中止すればOK
- 移植後、原疾患の再発または増悪(progressive disease)と診断された患者
- 慢性GVHDでステロイドを早期に中止・減量予定の患者
→登録後のステロイドの中止・減量の制限はない
- 60日以内に転院、転居予定
- 試験薬の併用禁忌薬剤を投与している患者

主要評価項目

- 投与開始後60日目における深在性真菌症発症予防成功。ただし発症予防の成功は、下記基準を全て満たす場合とする
- 深在性真菌症の発症を来たさないこと。(EORTC基準の provenあるいはprobableを深在性真菌症の発症とする)
- 生存していること
- 60日間、試験薬の投与が継続されていること
(治癒率80%(48日)以上を継続とみなす)

登録症例数の設定根拠・集積見込み

- 一剤の深在性真菌症発症予防成功率を70%、もう一剤の場合を80%と仮定
- SimonのRandomized Phase II selection designを用いて有効な治療群を正しく判定する確率を80%と設定すると、各群27、両群で54例が必要
- 20%の脱落を見込んで、目標登録症例数を各群33、両群で66例とした
- 同種移植患者が年間200例、登録基準を満たすGVHD合併患者が半数の100例、そのうち3分の1が実際に登録したと仮定すると、2年間で終了予定

登録手順・試験薬剤の供給

- 回収取得は、できれば移植前の10時に同時にに行っておく
- 各薬剤を1名分ずつJCRSUより持もって発送・保管
- 登録票をFAX(事前連絡が望ましい)
→肺部CT、ガラクトマンナン(DD Index)、BDG検査を登録前1週間でチェック。投与量計算は登録時の体重を用いる
- 適格性判定後、施設、急性/慢性GVHDを層別因子として無作為化割付(FAX連絡)
- 試験薬発送の手順書、各施設での受け取り、管理方法、返却方法についての覚書をJCRSUで作成予定

試験薬投与量

・ポリコナゾール

経口: 体重40 kg以上 - 1回200 mgを1日2回食間投与
体重40 kg未満 - 1回100 mgを1日2回食間投与
注射: 1回 4 mg/kgを1日2回点滴静注
*ローディングドーズは行わない

・イトラコナゾール

経口: 1回 2.5 mg/kgを1日2回空腹時に投与
→添付文書と異なる。ITCZの計量容器は検討中
注射: 1日1回 200 mgを点滴静注
*ローディングドーズは行わない

プロトコール治療時の注意点

- 登録後7日以内に治療開始を原則とする
- 原則として経口剤により治療開始するが、経口投与が不可、または静注が適切と判断された患者は注射剤により治療を開始する(理由を記録)
- 注射剤を投与した患者では、2週間以内に経口剤への切り替えにつとめる(腎毒性を考慮)
- 試験薬開始後は、シクロスボリン・タクロリムスの血中濃度が急速に上昇する可能性があり、毎回の血中濃度モニタリングを行なう
- 上昇の程度やタイミングは個人差が非常に大きい
- 血中濃度を毎回に測定できない場合は、シクロスボリン・タクロリムスを3分の2~半量へ減量してもよい(?)

試験薬の中止基準(1) 13

- EORTC基準でprovenまたはprobableの深在性真菌感染症を発症した場合(その後の変葉は自由とし、試験薬剤の提供は中止する)
 - 深在性真菌症を疑った場合は胸部CT、血清診断は必須
 - possibleの深在性真菌感染症(臨床的基準か、真菌学的基準:ガラクトマンナン検査やBDG検査陽性のどちらかを満たさない場合)では中止とせず、AMPH製剤またはMCFGの追加投与を行ってもよい(但し14日以内を限度とする)
- 抗真菌薬併用療法を14日以内に中止できない場合、または2度目の併用療法が必要と判断された場合

試験薬の中止基準(2) 14

- クレアチニクリアランスが30 ml/min未満で、経口薬の投与が不可能な場合
- CTCAE v3.0でgrade 4の非肝臓または非血液有害事象が発現した場合
- 試験薬に不耐容で、試験薬を減量しても投与難易度と主治医が判断し、休薬期間が合算して12日以上となつた場合
 - * 有害事象による試験薬休止後は、他薬による予防的な抗真菌剤投与は行わない
- 原疾患の再発や生着不全に対して、再移植や化学療法を行った場合

中止連絡表は中止決定から3日以内に送付

試験薬の減量 15

- 試験薬の減量は基準に抵触した症例に一律に行うものではなく、有害事象進展の速さ、試験薬投与前の症状・検査値などを考慮して総合的に判断する
 - <肝機能悪化による減量>
 - 総ビリルビンが5.0 mg/dl以上、またはALTが施設正常上限値の10倍以上に達した場合
 - <その他の有害事象による減量>
 - CTCAE v3.0のgrade 3に達した場合で、試験薬による有害事象が疑われる場合に考慮
- 減量に際しては、有害事象にともなう薬物血中濃度測定を行うことが望ましい

試験薬の血中濃度測定 16

- 一部の施設で薬物動態解析のため試験薬の血中濃度測定を行う
 - プロトコールは別途作成する
- 血中濃度測定の結果による投与量の調整は行わない
 - (濃度測定実施の有無による施設間のバイアスを避けるため)
- 試験の一環として行われた血中濃度測定による投与量調整は行わないが、有害事象発現に応じた血中濃度測定は全施設で可能、減量または一時休薬も可能

評価項目(CRF) 17

- ガラクトマナン抗原(プラテリア)検査は2週間に1回の施行を必須とする。BDG検査(同一患者では同一方法を用いる)も可能であれば2週間に1回の施行が望ましい
 - 真菌感染が疑われた時は両検査とも必須
- 深在性真菌症を疑う臨床症状があり、かつ血清マーカーが陽性となった場合には速やかに胸部CTまたは対象臟器に応じた部位のCT検査を実施する
- CTCAE v3.0にてgrade 3以上の有害事象を記入する
- 定期評価日(入院では7日おき、外来では14日おき)の前後3日までのいずれは許容範囲
- 60日目で終了時の検査は、56日目の検査結果をもってあてることを可能とする

緊急報告の対象となる有害事象 18

- プロトコール治療施行中の死亡(ただし明らかな原疾患による死亡は該当しない)
- Grade 4に該当する血液系以外の有害事象で、かつ予期せぬものであった場合

**有害事象発生緊急報告書は
72時間以内にFAXする**

<データレビュー委員・効果安全性委員>

吉田穂先生(帝京大学医学部附属病院・第4内科)
高田徹先生(福岡大学病院・腫瘍・血液・感染症内科学)